

パーソナリティと循環器疾患死亡リスクとの関連に対する生活習慣の媒介効果：宮城県コホート研究

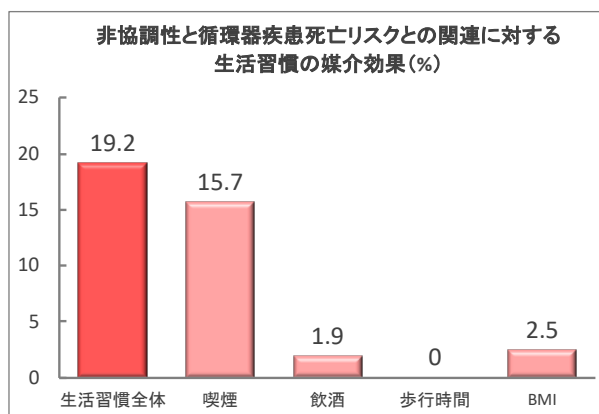
The mediating effect of lifestyle behaviors on the association between personality traits and cardiovascular disease mortality among 29,766 community-dwelling Japanese.

2019 年 Psychosomatic Medicine 発表

非協調性が高い者ほど循環器疾患死亡リスクが高く、この関連に最も大きな媒介効果があったのは喫煙であった

これまでの研究では、パーソナリティは循環器疾患死亡リスクのみならず、循環器疾患死亡のリスク要因である生活習慣とも密に関連していることが報告されています。しかし、パーソナリティと循環器疾患死亡リスクとの関連に対する生活習慣の媒介効果を検討した研究はありませんでした。本研究は、Eysenck のパーソナリティ尺度を用いて、パーソナリティと循環器疾患死亡リスクとの関連、及びその関連に対する生活習慣（喫煙、飲酒、歩行時間、BMI）の媒介効果を前向きコホート研究により検証したものです。その結果、非協調性の高い者ほど循環器疾患死亡リスクが高く、その関連に最も大きな媒介効果があるのは喫煙（15.7%）であることが明らかとなりました（図）。

一方、神経症傾向と循環器疾患死亡リスクとの間には有意な関連は見られませんでした。



研究のデータについて

解析には「宮城県コホート研究」のデータが使われました。1990 年 6 月～8 月にかけて、宮城県内 14 町村に居住する 40 歳から 64 歳までの全地域住民（51,921 名）を対象として、生活習慣に関する質問票とパーソナリティに関する質問票調査 Eysenck Personality Questionnaire Revised (EPQ-R) を配布し、ベースライン調査を実施しました。有効回答をいただいた 47,604 名（91.7%）のうち、パーソナリティ質問紙（EPQ-R）の回答に欠損がある者、EPQ-R の回答の全てを「はい」または「いいえ」とした方、心疾患・脳卒中の既往がある方などを除外した 29,766 名を対象に追跡を行いました。調査時から 2011 年 3 月まで約 21 年間の追跡を行い、追跡期間中に 1,033 名の循環器疾患を原因とした死亡者が確認されました。

パーソナリティに関する調査について

パーソナリティの調査は EPQ-R を用いています。EPQ-R は 48 項目からなり、「はい」「いいえ」で回答するものです。「外向性傾向（Extraversion）」「神経症的傾向（Neuroticism）」「非協調性（Psychoticism）」「社会的望ましさ（Lie）」の 4 つの下位尺度で構成され、各下位尺度は 0-12 点の範囲でスコア化されます。EPQ-R の信頼性及び妥当性はすでに確認されています。

媒介要因（生活習慣）と他のリスク要因の影響について

この研究では、パーソナリティと循環器疾患死亡の両者に関連する要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、調査開始時点での年齢、性別、教育歴、婚姻状況について、多変量解析による調整を行いました。その上で、生活習慣（喫煙、飲酒、歩行時間、BMI）の媒介効果を算出しました。

研究の特徴と限界について

本研究の特徴として、①生活習慣（特に喫煙）がパーソナリティと循環器疾患死亡リスクとの関連を媒介していることを世界で初めて示した点、②一般住民を対象とし、長期間に渡って前向きに追跡した大規模コホートデータを用いた点が挙げられます。

一方、本研究では、①ベースライン調査の 1 時点では生活習慣を評価していないため、生活習慣の変化を考慮できていない点、②パーソナリティと媒介要因である生活習慣を同時に評価しているため、媒介効果の推定にバイアスが生じている可能性がある点などが研究の限界として挙げられます。